



◆いつか福島に帰った  
ときのために



福島県生協連  
根本 喜代江氏

県外に避難している方との交流企画を行なったのは、福島県に住み続けている人との思いの格差を解消したいと思ったからです。県外に避難されている方々は、将来福島に帰った際、疎外感を覚えるのではないかなどと、不安を抱えていらっしゃると思います。この交流をとおして、そういった不安を少しでも取り除けたらと思っています。

保養プロジェクトに参加した親子から、「生協の力ってすごいね」とよく言われます。ただ、生協の力だけではできないこともあります。地域のNPOなど、多くの団体とつながり、もっと多様な視点で物事が見えてくればと願っています。

全国の生協からの募金で、私たちは安心して暮らしています。皆さま、これからも引き続き、ご支援をよろしく願いいたします。

県外に避難された方との交流も実施

～福島の子ども保養プロジェクト・初の交流企画～



寒だら汁を囲んで交流会。会場では、抽選大会も行なわれ、盛り上がっていました。

2月18・19日、「天童温泉 湯坊いちらく」（山形県）にて、「福島の子ども保養プロジェクト」（本誌10号参照）が開催されました。今回初の試みとして、福島から山形に避難している親子と、保養プロジェクト参加者、そして、生協共立社（本部・山形県鶴岡市）の組合員との交流企画が行なわれました。これは、山形県米沢市「避難者支援センター おいで」と生協共立社の共催企画で、庄内地方の郷土料理である寒だら汁を囲んで楽しい時間を過ごしました。生協共立社組織部長の伊藤稔さんは、「福島から山形に多くの方が避難されています。私たちも支援のあり方についてはまだ手探りの段階ではありますが、保養プロジェクトが始まったことで、だんだんと形が見えてきたように思います。今後もできることを随時やっていくつもりです」と話していました。

参加したお母さんの一人は、「境遇が同じ方と思いを共有できる場所があって、本当によかったです。寒だら汁もおいしくて、作り方を聞きたいと思いました」と笑顔で話していました。



「とてもとてもうれしいです」、「また明日からもがんばります」などと書かれたメッセージ。

全国へ「ありがとう」を届けよう

今回より、ツアーの参加者から協力団体へ、手描きのメッセージを贈る取り組みが始まりました。下書きに時間をかけたり、手形をなぞったり、家族の似顔絵を描いたり、参加者の親子は、クレヨンやペンで思い思いに感謝の気持ちを表していました。